



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	総合型地域スポーツクラブにおける高齢者コミュニティについての研究 : 愛知県蟹江町の生き生きかにえスポーツクラブを事例に
Author(s)	三島, 圭生
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士(文学)
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84570
Type	bachelor thesis
File Information	2021Mishima.pdf



令和3年度卒業論文

総合型地域スポーツクラブにおける
高齢者コミュニティについての研究
—愛知県蟹江町の生き生きかにえスポーツクラブを事例に—

北海道大学 文学部 人文科学科
人間システム科学コース 地域科学研究室
指導教員：宮内泰介
学籍番号：01182164
氏名：三島圭生

目次

1 はじめに	3
1-1 研究の背景と目的	3
1-2 調査地の概要・調査方法	4
2 総合型地域スポーツクラブとは	6
3 「生き生きかにえスポーツクラブ」各講座のコミュニティの性格.....	9
3-1 調査対象講座とその理由	9
3-2 各講座の講座内容の記録	9
3-3 参与観察、聞き取り調査から分析する各コミュニティの性格	12
3-3-1 各講座のコミュニティの親密度を簡易的に明示	12
3-3-2 男組のコミュニティ	17
3-3-3 太極拳のコミュニティ	19
3-3-4 貯筋運動のコミュニティ	19
3-3-5 フォークダンスのコミュニティ	20
3-4 質問紙調査の結果から分析する各コミュニティを形成する参加者	21
4 各講座のコミュニティ形成にかんする考察	25
4-1 参与観察、聞き取り調査の結果と質問紙調査の結果を合わせて、各コミュニティについて考察する目的	25
4-2 男組：親密度が低い背景	25
4-3 太極拳：「おばさんコミュニティ」が生まれる背景	26
4-4 貯筋運動：グループ間の親密度が低い背景	27
4-5 フォークダンス：親密度が高い背景	27
4-6 コミュニティの親密度に関する要因	28
4-6-1 要因を特定するための方法	28
4-6-2 要因 1:つながりを作ることを目的に参加しているか否か	28
4-6-3 要因 2:女性であるか否か	29
4-6-4 要因 3:参加している会員が固定されているか否か	30
4-6-5 要因 4:名札の存在(親しい関係性でない状態でも名前を呼び合うことがで	

きる環境か否か)	30
4-6-6 要因 5:反応がよい会員の存在(その会員が積極的に周囲に話しかけるか否か)	31
4-6-7 要因 6:グループワークが存在するか否か	31
4-6-8 要因 7:既に親しい関係であるか否か	32
4-6-9 まとめ	32

5 まとめ.....33

6 参考文献・参考資料.....34

1 はじめに

1-1 研究の背景と目的

現代の日本人はスポーツに触れる機会が少ない。2017年に文部科学省が発表した第2期スポーツ基本計画では、「ライフステージに応じたスポーツ活動の推進とその環境整備を行う。その結果として、成人のスポーツ実施率を週1回以上が65%程度(障害者は40%程度)、週回以上が30%程度(障害者は20%程度)となることを目指す。」としている¹。ところが令和2年11月に実施の「スポーツの実施状況等に関する世論調査」によると、成人の週1回以上のスポーツ実施率は59.9パーセントとなっている。前年度は53.6%で6.3ポイント増えているものの、まだ目標には届いていない²。そうした中、スポーツ庁はスポーツ実施率向上のための行動計画のなかで、国民がスポーツをするための施策として総合型地域スポーツクラブを取り上げている。「総合型地域スポーツクラブに地域住民がより参画しやすい環境を整備する」としている³。

さらにスポーツ庁は、総合型地域スポーツクラブに対して、地域におけるスポーツの振興、スポーツを通じた地域づくりなどに向けた多様な活動展開、地域スポーツの担い手としての役割、地域コミュニティの核としての役割など、スポーツに触れる機会を増やすだけでなく、スポーツを通じた地域のつながり作りを担う存在となることを期待している⁴。

現代の日本社会は、人のつながりが希薄化し、「孤独死」や「孤立死」に代表されるようなつながりの希薄化に起因する問題が生じている(松宮,2013)。総合型地域スポーツクラブはそれを解決するための手段の一つとして期待できる。

今回の調査地となる愛知県蟹江町は、第5次総合計画の中で、町民のコミュニティ意識の希薄化を背景に、地域組織の後継者不足や、地域組織への未加入世帯への対応などの問題を挙げている。そのための施策として地域組織の活性化を唱えている。その一環で蟹江町内の総合型地域スポーツクラブについて言及し、町民の健康づくり、仲間づくりを促進するため

¹ 第2期「スポーツ基本計画」

https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf

² 令和2年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/sports/1415963_00004.htm

³ スポーツ実施率向上のための行動計画

https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2018/10/02/1408815_01.pdf

⁴ スポーツ庁

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop05/list/1371972.htm

に活動を活性化させると書いている⁵。

蟹江町の高齢者人口は微増を続け、高齢化率も緩やかに増加しており、25.3%（2020年）となっている⁶。高齢者人口の内訳として、前期高齢者（65歳から74歳）は年々減少し4726人（2020年）である⁷。一方で後期高齢者（75歳以上）は年々増加し、4787人（2020年）となっている⁸。

「スポーツ機会の減少」と「人のつながりの希薄化」に対して、総合型地域スポーツクラブは重要な存在である。スポーツ庁や蟹江町が言及しているように、仲間づくりの場として期待されている総合型地域スポーツクラブだが、実際にはどうであろうか。総合型地域スポーツクラブを題材としたコミュニティの研究はほとんど行われていない。そこで本研究は、超高齢社会となっている愛知県蟹江町にある総合型地域スポーツクラブ「生き生きかにえスポーツクラブ」を取り上げ、ここでは高齢者がどのようなコミュニティを形成しているのか、またどうしてそのようなコミュニティになっているのかについて考察することを目的とする。

1-2 調査地の概要・調査方法

蟹江町は愛知県の尾張地区、名古屋市の西側に隣接する町である。人口は37,551人（2020年）となっている⁹。愛知県蟹江町にある総合型地域スポーツクラブ「生き生きかにえスポーツクラブ」を事例に、クラブ全体の経営管理を行う立場であるクラブマネージャー¹⁰への聞き取り調査と、調査対象とした3つの講座「太極拳」「貯筋運動」「フォークダンス」と1つの蟹江町からの受託事業「男組」への参与観察と、各講座に参加する講師、会員への聞き取り調査を実施した（以下4つの講座と呼称）。また、4つの講座にて1回ずつ質問紙調査を実施した。調査期間は2020年の6月から7月、2021年の8月から11月までである。調査を実施した日程は表1の通りである。

⁵ 第5次蟹江町総合計画 <https://www.town.kanie.aichi.jp/uploaded/attachment/12647.pdf>

⁶ 第9次高齢者保健福祉計画及び第8期介護保険事業計画
<https://www.town.kanie.aichi.jp/uploaded/attachment/12440.pdf>

⁷ 第9次高齢者保健福祉計画及び第8期介護保険事業計画
<https://www.town.kanie.aichi.jp/uploaded/attachment/12440.pdf>

⁸ 第9次高齢者保健福祉計画及び第8期介護保険事業計画
<https://www.town.kanie.aichi.jp/uploaded/attachment/12440.pdf>

⁹ 第9次高齢者保健福祉計画及び第8期介護保険事業計画
<https://www.town.kanie.aichi.jp/uploaded/attachment/12440.pdf>

¹⁰ 文部科学省

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/029.htm

表 1 日程一覧

対象	年月日	調査内容
クラブマネージャー	2020年6月25日	聞き取り調査
	2021年7月30日	聞き取り調査
男組	2021年8月4日	参与観察、聞き取り調査(2名)
	2021年10月6日	参与観察、聞き取り調査(4名)、質問紙調査
	2021年11月16日	参与観察、聞き取り調査(3名)
太極拳	2021年8月5日	参与観察、聞き取り調査(5名)
	2021年11月4日	参与観察、聞き取り調査(2名)、質問紙調査
	2021年11月18日	参与観察、聞き取り調査(6名)
貯筋運動	2020年7月2日	参与観察、聞き取り調査(5名)
	2020年7月16日	参与観察、聞き取り調査(4名)
	2021年10月7日	参与観察、聞き取り調査(3名)、質問紙調査
	2021年11月11日	参与観察、聞き取り調査(4名)
フォークダンス	2020年7月8日	参与観察、聞き取り調査(4名)
	2020年7月22日	参与観察、聞き取り調査(2名)
	2021年11月10日	参与観察、聞き取り調査(2名)、質問紙調査
	2021年11月17日	参与観察、聞き取り調査(3名)

2 総合型地域スポーツクラブとは

総合型地域スポーツクラブとは、「人々が、身近な地域でスポーツに親しむことのできる新しいタイプのスポーツクラブで、子供から高齢者まで（多世代）、様々なスポーツを愛好する人々が（多種目）、初心者からトップレベルまで、それぞれの志向・レベルに合わせて参加できる（多志向）、という特徴を持ち、地域住民により自主的・主体的に運営されるスポーツクラブ」である¹¹。特徴として文部科学省は次のように述べる¹²。

「1.単一のスポーツ種目だけでなく、複数の種目が用意されている。2.障害者を含み子どもからお年寄りまで、また、初心者からトップレベルの競技者まで、そして、楽しみ志向の人から競技志向の人まで、地域住民の皆さんの誰もが集い、それぞれが年齢、興味・関心、体力、技術・技能レベルなどに応じて活動できる。3.活動拠点となるスポーツ施設を持ち、定期的・継続的なスポーツ活動を行うことができる。4.質の高い指導者がいて、個々のスポーツニーズに応じた指導が行われる。5.スポーツ活動だけでなく、できれば文化的活動も準備されている。」

全国には 3549（2020 年）もの総合型地域スポーツクラブが存在し、愛知県には 139（2020 年）個のクラブが存在する¹³。

今回の調査対象とした蟹江町の総合型地域スポーツクラブの名称は「活き生きかにえスポーツクラブ」である。組織形態としては特定非営利活動法人である。クラブの理念として、1.誰もが気軽に自由に参加でき楽しめるクラブ、2.健康づくり、仲間づくりの場となるクラブの 2 つを掲げている¹⁴。2010 年の設立から 10 周年が経過した際には 10 周年記念誌が作成された。講座数は常設講座が 15 個、特別講座が 3 個となっている（2021 年）¹⁵。講座が催される場所は蟹江町の中央公民館など、公共施設の一部である。特別講座とは、常設講座に参加する人のみ参加する資格を持つ。常設講座は 2 週間に 1 回開催される。講座の種類は表 2 の通りである。

¹¹ スポーツ庁

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop05/list/1371972.htm

¹² 総合型地域スポーツクラブ育成マニュアル

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/004.htm

¹³ 令和 2 年度総合型地域スポーツクラブ育成状況（一覧表）

https://www.mext.go.jp/sports/content/20210409_spt_kensport01_000013940_01_1.pdf

¹⁴ 活き生きかにえスポーツクラブ 10 周年記念誌

¹⁵ 活き生きかにえスポーツクラブ令和 3 年度年間日程予定表

表 2 生き生きかにえスポーツクラブの講座一覧

常設講座(2週間に1回)	
一般種目	ジュニア種目
リフレッシュヨガ	サッカー(小学生)
楽トレッチ	チアダンス(年中～2年生)
フォークダンス	ミニバスケットボール(3～6年生)
健康太極拳	キッズダンス(小学生)
美・bodyエクササイズ	ジュニア卓球(小学生)
シンプルヨガ	ソフトテニス(3～6年生)
ピラティス	
ナイトヨガ	
卓球(中学生以上)	
特別講座	
貯筋運動教室	→毎週
キッズうんどう(年長～3年)	→2週間に1回
ソフトテニス中学生	→2週間に1回

クラブ会員数は 350 名である¹⁶。これは 2021 年の常設講座の人数のみを計上したものである。会員のおよそ 9 割は女性である¹⁷。入会金は 1000 円で、年会費は 7000 円となっている。全期(4月～翌年3月)での参加費は 6000 円、半期(4～9月,10月～翌年3月)での参加費は 4000 円となっている。特典として、同居の家族 2 名以上の同時入会の場合は、1 人に付き 1000 円の割引をする家族割引を用意している。同様に常設講座へ全期登録者限定の特典として、1.2 種目目への参加費用が 4000 円で参加可能 2.貯筋運動教室へ、専用回数券(5 回分,2000 円)で参加可能の 2 点を用意している¹⁸。特別講座への参加費については「貯筋運動」は毎月 2000 円、「キッズうんどう」は 5 回分で 2000 円、「ソフトテニス中学生」は 5 回分で 2000 円となっている¹⁹。

常設講座だけでは参加する人数が減少してしまったため、特別講座を設置している²⁰。上記の通り特別講座は月謝制や回数券の制度を用いている。これは「会員にとって参加しやすくなるかもしれない」というクラブスタッフの案を活かしたものである²¹。講師の選定にかんしては、スタッフが直接依頼し、任命する形式である²²。クラブへの入会は蟹江町在住者

¹⁶ 2021 年 7 月 30 日クラブマネージャー聞き取り調査より

¹⁷ 2020 年 6 月 25 日クラブマネージャー聞き取り調査より

¹⁸ 生き生きかにえスポーツクラブ「令和 3 年度会員募集パンフレット」より

¹⁹ 生き生きかにえスポーツクラブ「令和 3 年度会員募集パンフレット」より

²⁰ 2020 年 6 月 25 日クラブマネージャー聞き取り調査より

²¹ 2020 年 6 月 25 日クラブマネージャー聞き取り調査より

²² 2020 年 6 月 25 日クラブマネージャー聞き取り調査より

に限定しておらず、近隣の地方自治体から入会している人もいる²³。実際に見学をした講座においても、名古屋市から参加している会員の存在を確認した。クラブスタッフの案によって開設する種目を決めており、現時点ではこれ以上種目を増やすつもりはなく、現状を維持する方針である²⁴。

クラブでは会員数が 250 人よりも少なくなると運営に支障が出てしまうとクラブマネージャーは話す²⁵。2021 年度では常設講座に 350 名の会員が登録しているのでまだ余裕のある運営ができていると判断することができる。しかし設立当初から会員数が減少していることも事実であり、前述の通り特別講座を設立した背景には財源の確保の必要があった。

クラブは2つの理由から蟹江町の行政と連携が取れているクラブだと判断できる。

1つ目は第5次蟹江町総合計画のなかで、生き生きかにエスポーツクラブについて触れられているという事実からである。蟹江町は 2021 年から 2030 年において、中長期的に町政を発展させていくために第 5 次蟹江町総合計画を策定した。町の最上位計画である総合計画は基本構想、基本計画、実施計画の3点から構成される。そのなかで基本計画は重点戦略（第2期総合戦略）と分野別計画に分けられる。さらに重点戦略は4点の基本戦略と2点の横断的な戦略に細分化される。4点の基本戦略のうちの1つ「住みたい・住み続けたい安全・安心な地域づくり」を達成する施策として「生涯学習・生涯スポーツ・健康づくりの促進」を掲げ、具体的な事業として「生き生きかにエスポーツクラブ等との連携をより密にする」と書かれている。また5つの分野からなる分野別計画のうちの1つ「教育・文化」の「生涯スポーツ」の項目において、「生き生きかにエスポーツクラブ」の活動活発の必要性を明言している²⁶。

2つ目は実際に蟹江町からの受託業務を実施しているという現状からである。クラブは介護支援課から受託して1.男組 2.町内巡回型介護予防事業、子ども課から受託して3.キッズ運動の講座を開催している²⁷。クラブマネージャーと町役場の介護支援課の担当者との雑談が、男組の受託に至るきっかけである²⁸。キッズ運動については、クラブの登録会員数が減少していくなかで、クラブマネージャーがクラブの収益改善のために町役場に話をもちかけた。当初は夏休みに児童館にて無償でキッズコーディネーショントレーニングを行い、売り込むことで受託業務として成立に至った²⁹。

²³ 2020年6月25日クラブマネージャー聞き取り調査より

²⁴ 2020年6月25日クラブマネージャー聞き取り調査より

²⁵ 2021年7月30日クラブマネージャー聞き取り調査より

²⁶ 第5次蟹江町総合計画

<https://www.town.kanie.aichi.jp/uploaded/attachment/12647.pdf>

²⁷ 2020年6月25日クラブマネージャー聞き取り調査より

²⁸ 2021年7月30日クラブマネージャー聞き取り調査より

²⁹ 2021年7月30日クラブマネージャー聞き取り調査より

3 「生き生きかにえスポーツクラブ」各講座のコミュニティの性格

3-1 調査対象講座とその理由

前述の通り様々な講座を開講している生き生きかにえスポーツクラブではあるが、今回は高齢者のコミュニティに焦点を当てるために、高齢者が多く参加する講座をクラブマネージャーに推薦していただいた。調査を実施した講座は「男組」「太極拳」「貯筋運動」「フォークダンス」の4つである。「太極拳」と「フォークダンス」は常設講座であり「貯筋運動」は特別講座である。「男組」は蟹江町役場の介護支援課からの受託事業である。「男組」は名前が示す通り参加は男性のみに限られている。蟹江町に住民票のある65歳以上の男性である³⁰。その他3つの講座では参加者の9割以上を女性が占めている。「フォークダンス」については参加者が全員女性であった。これらの講座を調査対象とすることにより、男性と女性では、形成するコミュニティの性格に違いはあるのか、また、参加者の9割が女性という3つの講座では、コミュニティの性格に違いはあるのか、など、様々なコミュニティの性格やその違いを明らかにすることができると考えた。よってこれら4つの講座にて調査に臨んだ。

本研究ではまず、講座において参加者同士の交流はあるのか、どのような会話をしているのかなど、講座全体の様子を記録するために参与観察を実施し、参加者がこの講座において親しく接する人ができたのかどうか、また、どうして親しくしているのかなど、参加者の声を直接記録するために聞き取り調査を実施した。そして、その記録となった背景には参加者の年齢層、性別、居住環境などの要因があるのではないかという仮説から質問紙調査を実施した。

3-2 各講座の講座内容の記録

講座では、参加者はどのようなことをしているのだろうか。その様子を観察して記録した。ある一日の講座の記録を表3から表7にまとめた。

まず「男組」の料理教室では、表3のように調理作業があるため、2時間と他の講座よりも時間が長くなっている。始めに講師からの説明を受けたのちに、グループに分けられた参加者が協力して調理作業に取りかかる。体操教室は表4のように1時間で、参加者同士コミュニケーションをとりながら行う運動がタイムスケジュールの大部分を占める。

「太極拳」は表5のように1時間の構成となっており、音楽に合わせて静かに動作を行う。グループワークは存在しない。

「貯筋運動」は表6のように、「太極拳」と同様に1時間の構成で、グループワークがなく、音楽に合わせて運動を行う。グループワークは存在しない。

³⁰ 蟹江町役場介護支援課「男組参加者募集チラシ」より

「フォークダンス」は表7のように1時間30分であり、基本的に他の参加者とコミュニケーションをとりながらステップのレクチャーを受ける、グループでダンスを実践する、などの内容であった。

表 3 2021年11月6日男組料理教室

9時30分	説明
9時40分	調理開始 説明の神を見て分業しながら作業
10時00分	次の説明 講師が実演
10時10分	調理開始
11時10分	片付け
11時30分	料理のポイント説明 使った器具の確認
11時40分	終了

表 4 2021年10月6日男組体操教室

9時30分	ストレッチ
9時45分	水分補給 BGMを流して運動 片足立ち 1分 両足/スクワット/ランジ 「グループワーク」(毎回異なる) 1.14人が半分になり円を作り足踏みをしながら a.100から5ずつ引いた数字を言う b.3ずつ引いた数字を言う c.行きたい都道府県を言う 2.講師とじゃんけんをして負けるものを出す という脳トレ
10時10分	貯筋運動
10時15分	ヨガマットを使用した柔軟体操
10時30分	終了

表 5 2021年11月4日 太極拳

10時00分	ストレッチ
10時05分	一段錦と呼ばれるもの 音楽に合わせて 二段錦 三段錦 四段錦 各錦の間に休憩はなく一連の動きを通して行う
10時20分	休憩
10時30分	音楽をかけずに講師が動きの指導 五段錦 六段錦 整理運動
11時10分	終了

表 6 2021年10月7日 貯筋運動

10時00分	「線路は続くのどこまでも」の音楽に合わせて講師の動きを真似して全身の準備体操
10時15分	水分補給
10時17分	「線路は続くのどこまでも」の音楽に合わせて椅子に座りながら貯筋運動
10時23分	トレーニング 別の音楽に合わせて椅子は使わず立って貯筋運動
10時30分	水分補給
10時32分	有酸素運動 別のハイテンポの音楽に合わせて椅子は使わずその場でずっと足踏みをしながら様々なステップ
10時48分	床に座って靴を脱いでストレッチ 深呼吸
11時00分	終了

表 7 2021年11月10日 フォークダンス

9時30分	音楽に合わせてストレッチ
9時40分	全員で円になって ステップの確認 → だんだんアップテンポになる音楽に合わせて 実践
9時45分	次のステップ 全員で円になって講師がステップを実践しな がら説明をしていく ステップの確認 → 音楽に合わせて実践 → ステップの確認 → 音楽に合わせて実践 の連続
10時06分	前を向いて ステップの確認 → 音楽に合わせて実践
10時12分	休憩
10時16分	グループワーク 4人1組 ステップの確認 → 音楽に合わせて実践
11時00分	終了

3-3 参与観察、聞き取り調査から分析する各コミュニティの性格

3-3-1 各講座のコミュニティの親密度を簡易的に明示

参与観察と聞き取り調査により収集した記録の1つ1つが各講座のコミュニティの性格を表しているが、そこには相反するような記録も存在する。

そこで、本研究では、各コミュニティの性格をおおまかに理解するために、まずは参与観察と聞き取り調査のデータ一覧からコミュニティの親密度の高さを示していると思われる記録を抽出した。表8の通りである。その記録の親密度を3つの観点からそれぞれ1点か

ら4点まで点数づけを行い、数直線上に集計して表す。そうすることで各コミュニティの親密度を理解しやすい形式にし、各講座のコミュニティについておおまかに理解する。さらにその後、簡易的に示すだけでは網羅することができない各講座のコミュニティの性格を、1つ1つ丁寧に言葉で表していく。

コミュニティの親密度は「会話」「どこまで相手と共有しているのか」「関係性の段階とその時期」の3つの観点で測る。

「会話」では

- 1.話さない
- 2.挨拶をする,講座にかんする話題を話す
- 3.世間話をする
- 4.プライベートな話をする

の4段階とした。

「どこまで相手と共有しているのか」では

- 1.顔
- 2.名前
- 3.連絡先/住所
- 4.講座外の時間

の4段階とした。

「関係性の段階とその時期」では

- 1.友人ではない
- 2.友人である,この講座にて
- 3.友人である,クラブの別講座にて
- 4.友人である,クラブ参加前から

の4段階とした。

データ一覧から、親密度を示しているデータをピックアップし、表にした。例えば、「全員名札をつけるから名札を見れば名前がわかるが「〇〇さん休み」などすでに名前を知っている人もいる」という記録の名愛、「会話」では4点、「どこまで相手と共有しているのか」では3点、「関係性の段階とその時期」では2点以上である。断定することが難しく、低く見積もって点数をつける場合のみ「以上」という言葉を付ける。黒い点で表記してあるものが「以上」とつけるべきと判断した記録である。このような点数づけの作業を行った結果が図1から図4である。

表 8 参与観察と聞き取り調査のデータ一覧から親密度を示す記録を抽出し、点数づけたもの

男組	会話	どこまで相手と共有しているか	関係性の段階とその時期	太極拳	会話	どこまで相手と共有しているか	関係性の段階とその時期
全員名札をつけるから名札を見れば名前がわかるが「〇〇さん休み」などすでに名前を知っている人もいる	4	3	2以上	休憩中に5人、2人などで集まり会話をしている	2以上		
和気藹々、会員同士で喋りながらストレッチ	2以上			来たら全員挨拶はする	2以上		
2人は会場が開く前から現場にいて学戸ふれあいプラザの館長とお話をされていた	3以上	2以上	2以上	今年から入会した2人は休憩中も一人でいた、まだ周囲になじんでいない様子	1	1	1
講座前2人が隣同士で話をしている 一怪我をした話をしている	4	2以上	2以上	来るのが見えたら椅子を用意していた人がいた その人に電話をしたと話していた		3以上	2以上
講師に対して「〇〇さんは今日休み」	4	3以上	2以上	「友達はまだいない」			1
開始前も含む3人で話す	3以上			「ご近所さん同士で元々ヨガに参加していた」 「ヨガも太極拳も講座中に話すことはないが、仲良くなる」	4	4	4
「お互い名前知ってるわけではない、全員は知らないが知っている人もいる」		2以上または1	1	3人「おばさんコミュニティ/連絡先は知らない、名前も知らない、ただ会ったら喋る」	2以上	1	1
「顔はわかって名前分らないことが多い」		1	1	講師「ここで会ってそのままご飯に行く人もいる」	3以上	4	2以上
「料理もすごく楽しみ、4人か3人で一つのグループを作り、3品作る、食材を水で洗うなど分業が存在、コミュニケーションを取りながら行う」	2以上			講師ともう1人の女性「2人は元々別の太極拳の教室(講師を育成するための教室)で顔見知り、名前も知っている」「13年前くらいから知り合い」		2以上	
				70代とみられる女性2人「2人は向かいに住んでいるご近所で、もう1人を誘って次の年から入った」 上記の2人「辞めた人とはこの教室で仲良くなった(話す)が今年入った新しい人とはまだ話したことはない」	4	4	4
				70代とみられる女性2人「30年来の友人で飲み友達」 「(1人は)台湾出身で、太極拳に馴染みがあるため誘って2人で同じタイミングで参加した」	1	1	1
					4	4	4

貯筋運動	会話	どこまで相手と共有しているか	関係性の段階とその時期	フォークダンス	会話	どこまで相手と共有しているか	関係性の段階とその時期
2人「お久しぶりだねー〇〇さん」 「腰が痛いし昼寝ばっかしてる」	4	2以上		会員同士名前を知っている 全員名札をしている		2以上	
2人「今度北海道と一緒に旅行に行くんだけど、おすすめの名所ない？」 「一緒に北海道旅行に行ったのよ」 講座終了後2人で車に乗って帰っていった	4		2以上	講師の妻は全員の名前を知っている		2以上	
2人の男性は体操の合間の休憩時間に頻りに話していた 昨年から引き続き参加、男組という別の講座で顔見知りの状態	2以上			会員同士で携帯電話を所持し始めた話や膝が悪くなった話をしている	4		
女性が「この講座はいつから？」と隣の人に話しかける	2以上			講座終了後4人組が近くのカフェへ移動	4	4	
講座後に4人が会話 「頭髪がすきみに白くなってきた」 そのうち3人は北海道旅行のお土産を渡しあう仲 「元々友人関係で誘って入会した」	4	4	4	女性1人「休憩中に仲良く話していた人とは入会前から友人」	4	4	4
女性1人「他の講座で見たことあるから顔は分かって名前分らない」		1		引き続き「女性の特徴として、顔を合わせたら話始めると思う」「女性にとっては普通」「名札があることは名前を覚える上でメリットだが名札がなくても名前は覚えている」「何回か通って顔を合わせたら覚える」	2以上	2以上	
女性1人「ここで知り合い、仲良くなって名前を知る仲間になった」	4	2以上	2	女性2人「いつも3~5人で行く」「プライベートなことも話す」「どこに住んでいるかを知っている」「講座とその後のカフェ以外では会わない」「ここで知り合った」	4	4	2
70代とみられる女性5人「直接友人に誘われたわけではなく、友人を誘った側である」「友人に誘われて入会した、5人は元々友達である」「すでに友人関係があるため、新しく友人関係はできていない、友人がいなくて一人だったら声をかけようと思う」 「講座の場以外で遊びに行くことや、喫茶店に行くことはある」	4	4	4	女性1人「元々友人ではなくどの人とも初対面であった」「現在も名前を覚えているかどうか微妙」 「同じ講座を取っている人と喫茶店に行くとかはたまにある」	3以上	2かつ4	
60代とみられる女性3人「2人は元々友人関係で、もう1人はここで知り合った」「この講座に入って3年くらいなので、長かったらやはり仲良くなる」「お茶とかはせず、この場所で会って話して帰ることがほとんど」	3以上	2以上	2以上	女性1人「2週間に1回、月2回しか会わないが、5~6年もいるから仲良くなる、町内なのでたまに다가スーパーとかで会うこともあり、喋る」	3		

この表を元に、各講座の親密度を示すと以下の図になった。

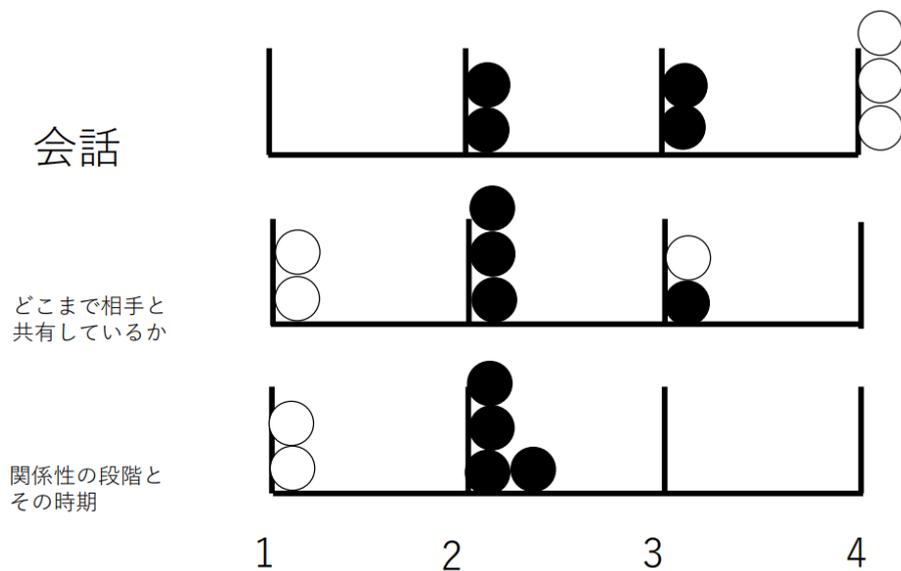


図 1 男組 親密度

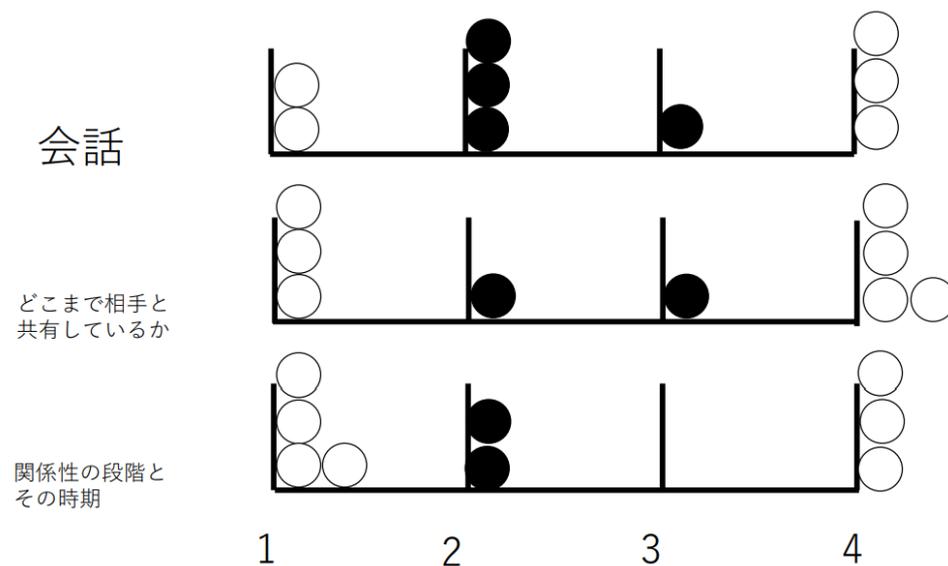


図 2 太極拳 親密度

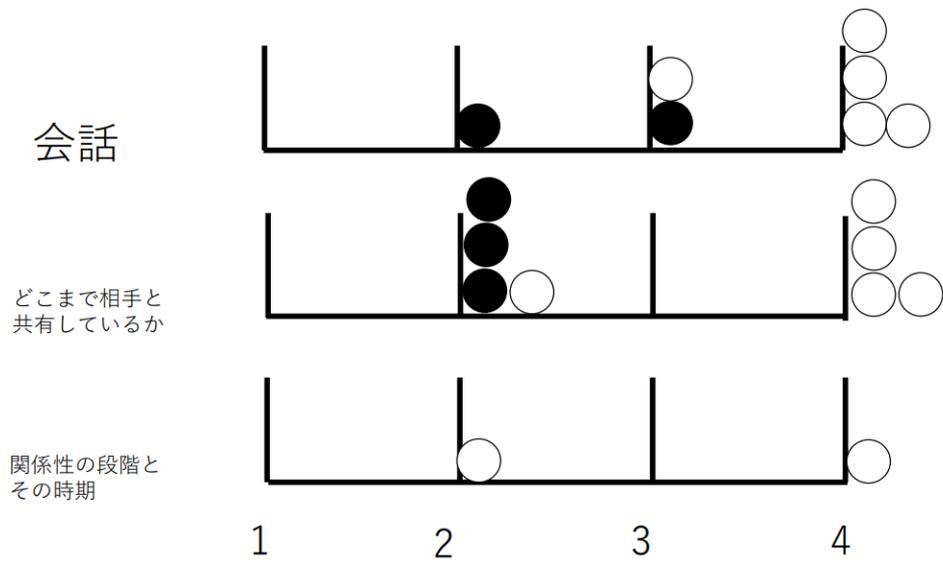


図 3 貯筋運動 親密度

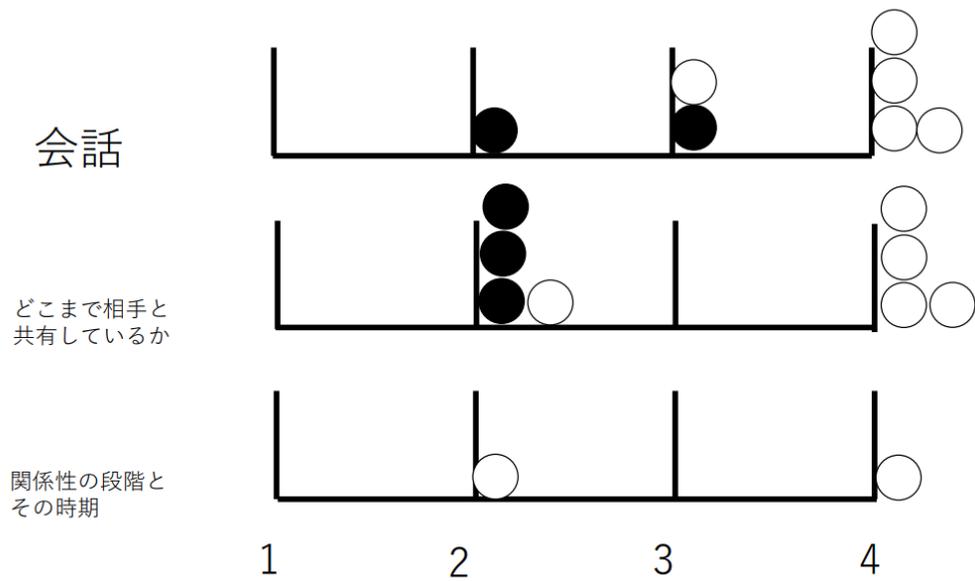


図 4 フォークダンス 親密度

この図から、各講座のコミュニティの親密度について何が分かるだろうか。
 まず、「男組」は「プライベートな話をする」、「名前」、「友人である,この講座にて」がボ

リユームゾーンとなった。このデータを分析すると、この講座で友人関係にはなっているものの、この講座以外で会うことはないを読み取れるので、参加者の関係はこの講座だけのものとなっている。

次に、「太極拳」は「プライベートな話をする」と「挨拶をする,講座にかんする話題を話す」、「講座外の時間」、「友人ではない」がボリュームゾーンとなった。このデータを分析すると、親しい関係性の人と親しくない関係性の人が共に存在している。つまり、親しい関係性のグループが複数存在するが、グループ同士での交流はない、もしくはあったとしても親しくなるほどではないということである。

また、「貯筋運動」は「プライベートな話をする」、「名前」と「講座外の時間」、「友人である,この講座にて」がボリュームゾーンとなった。このデータを分析すると、「太極拳」と同様に講座内での人間関係の親密度は二分化されている。プライベートな話までする関係性の人もいれば、挨拶だけするという人もいる。

最後に、「フォークダンス」は「プライベートな話をする」、「顔」と「講座外の時間」、「友人である,この講座にて」と「友人である,クラブ参加前から」がボリュームゾーンとなった。データを分析すると、会員同士は友人関係の者が多く、プライベートな話題や時間を他の参加者と共有する間柄になっている者が多い。

3-3-2 男組のコミュニティ

以上のように、各講座のコミュニティの親密度を簡易的に示すことで、その性格を大まかに理解することができた。そこで今度は、参与観察と聞き取り調査により得られた記録を活用し、より詳細にコミュニティを描写していくことによって、各講座のコミュニティの性格をさらに明らかにしていこう。

「男組」は体操教室と料理教室に分かれており、月に1回ずつ開催される。今回の調査では計3回の見学を行い、参加者の平均人数は14人であった。以下、参与観察と聞き取り調査の結果を元にコミュニティを記述する。

70代とみられるAは地域コミュニティのためにこの講座に参加している³¹。Aはこの講座に参加する以外にも、蟹江町立図書館横にある公園にてラジオ体操を行う会を主催するなど、その行動から地域社会とのつながりを重要視していることが分かる。ただ体を動かすだけならば現在通っているジムだけで十分だと話す。Aは体操教室中、講師の呼びかけに反応して講座中によく声を出していた。その声は講座中の静かな雰囲気を崩し、他の参加者も声を出し始めるきっかけを作っていた。

この講座への参加資格は蟹江町に住民票がある65歳以上の男性である。60代とみられるBは、男性で集まった方が心地よいと感じている。一方で先ほどのAは、女性がいなか

³¹以下、この項の記述は2021年の8月4日、10月6日、11月16日の参与観察、聞き取り調査より

ら参加しやすい、などと考えたことはないという。

クラブマネージャーは、「男組」に初めて参加する会員から優先的に参加することができるようにしていると話した。参加者の顔ぶれは毎年変わり、定員に空きがある場合に、参加経験者も参加を認める仕組みである。仮に一年共に講座に参加したことで、親しくなったとしても、次の年にまた新たな参加者が加わると、講座の雰囲気や親密度が変わってしまう、ということは容易に想像することができる。

この講座では名札を用意して、会員同士、また講師と会員の間でお互いの名前が分かるようにしてある。そのような状況にもかかわらず、Bは全員の名前を知らないと話す。このBは80代のCと親しい様子が見られ、体操教室の前には会場の入り口近くにて2人で談笑していた。そして体操教室中も隣同士の席に座り、自分が怪我をしたことをCさんに話していた。

私が料理教室を見学した日、Bは欠席であった。料理教室は3人1組で調理作業に臨む。必要な作業の確認、担当する作業の割り当て、作業の順番、食材の切り方、火加減など、班のメンバーとコミュニケーションをとりながら調理していく。Bは、普段はCと同じ班であり、料理教室で培った親交は体操教室に活かしていることが分かる。またここで分かることは、同じ講座のなかでも親しくしていない人には関心がないということだ。他の会員の顔は分かるが、名札があるにもかかわらず名前すら覚えようとはしないということである。同様の旨を60代とみられるDも話していた。

Cは83歳で参加している会員の中でも2番目の年長者である。そのCは、体操教室において、講師の席に誤って座ってしまった他の会員に声をかけて、移動を促すなど周囲の様子に気を配っていた。講座中には、講師の呼びかけに応じてよく声を出しており、静かな雰囲気を崩していた。講座後には講師と話していた。周囲に気を配ることができ、声を出すことで静かな空気を変えることができる彼は、講座の雰囲気に大きな影響を持っていると感じた。Eは89歳で参加している会員の中で最年長である。Eは話すことが大好きな様子で、体操教室が始まる前、椅子に座って講師に対して大きな声で話しかけていた。この声も静かな雰囲気を崩すものだった。前述のAも講師の呼びかけに反応して声を出しており、同様に静かな雰囲気を崩すものだった。

体操教室ではグループワークがあった。参加者が半分に分けられて、コミュニケーションをとりながら運動をするものである。必ずコミュニケーションをとらなければならない、講座中にはなかなか声を出さない高齢の男性達が、強制的に声を出す状況に置かれていた。前述の通り料理教室でも班に分けられて共同で作業を行う。私が参加した日は豚の角煮の調理に取り組んでいた。ある班が火加減を間違えて焦がしてしまったが、その班員は笑いながら作業を継続していた。コミュニケーションをとらざるを得ない状況に置かれることで、会員同士親しくなるきっかけとなっていると感じた。

3-3-3 太極拳のコミュニティ

「太極拳」は2週間に1回開催される。今回の調査では計3回の見学を行い、参加者の平均人数は17.3人であった。以下、参与観察と聞き取り調査の結果を元にコミュニティを記述する。

この講座では会場に到着した人から各々椅子をとり、壁際に配置する³²。そして休憩中に参加者は各々椅子に座る。数回の観察の結果、参加者にはいつもの位置、定位置がある、ということが分かった。50代とみられる女性3人F,G,Hに話を聞いた。F,Gは近所に住んでおり元々知り合いで、別の講座にも一緒に参加するほどの仲だそう。しかしその2人とHとの関係を聞くと、名前も連絡先も知らないという。ただいつもの位置が隣だったということである。これを3人は、女性ならではの「おばさんコミュニティ」だと話していた。

着ている服の話題などを親しく話し込む70代とみられる女性2人I,Jに話を聞いた。Iは11年目、Jは10年目と講座開始当初から参加している年長者である。今年は長年参加していた人が多く辞めてしまい、新しく入ってきた人が多く、そういう人とはまだ話したことがないという。しかし辞めてしまった人達とはこの講座を通して親しい関係になっていたという。

70代とみられる女性K、同じく70代とみられる女性Lは休憩中1人で椅子に座っているか体を動かしていた。2人とも今年から入会した人で、まだ友人はできていないと話した。

講師にも話を聞いた。今年は新しく入った人が多いので静かな雰囲気であると話した。

講座内容に注目する。太極拳は動作中に声を出すことはなく、個人で行うためグループワークもない。そのため、会員同士が話すタイミングがあるとするならば、講座前の時間か、休憩時間の5分だけである。

先ほどのF,Gは近所に住んでおり、既に親しい関係だった。聞き取り調査の結果、他にも2組既に親しい関係である人達の存在を確認した。I,Jも近所に住んでおり、講座開始当初から参加している一方の人がもう一方を誘って入会した。もう1組の60代とみられる女性M,Nは知り合ってから30年以上経つ、飲み友達であると話した。Mは台湾出身で太極拳に親しみがあり、Nを誘って一緒に入会した。

休憩中、2人で話し込んでいる組が5組存在した。その一方、1人で椅子に座っている、もしくは体を動かしている人が5人いたことが気になった。

3-3-4 貯筋運動のコミュニティ

「貯筋運動」は1か月に1回開催される。2020年に2回、2021年に2回の計4回の見学を行い、参加者の平均人数は16.3人であった。以下、参与観察と聞き取り調査の結果を元

³² 以下この項の記述は2021年の8月4日、11月4日、11月18日の参与観察、聞き取り調査より

にコミュニティを記述する。

70代とみられる男性3人 O,P,Qの様子を観察した³³。この講座に参加する男性は彼らのみである。彼らは講座前も休憩中も常に3人で話し込んでいた。周囲に女性がいるが、女性からも彼らからも、話しかける様子は見受けられなかった。大勢の女性のなかで少数となった男性同士で自然と話すようになったのではないかと考える。

60代とみられる女性3人 R,S,と Tはこの講座で親しくなったと話した。3人ともこの講座に入って3年は経つので、やはり長年顔を合わせるうちに仲良くなったようである。

親しい関係ではお互いの名前を知っていることは当然考えられる。聞き取り調査の結果、この講座では参加前から友人関係であった人が多く、この場で新たに親しくなり話をするようになった人は少ない。つまり既に名前を知っている関係性のグループが集まっているということが分かった。しかし例外も確認することができた。70代とみられる女性Uは、同じく70代とみられる女性Vとこの講座で知り合い、仲良くなり、名前を知る関係になったと話した。この講座においてこのような事例は1件しか確認できなかった。

60代とみられる女性 W,X,Yは、この講座に参加する前から既に友人関係であり、一緒にこの講座へ参加したようである。この3人は共に北海道へ2泊3日の旅行へ行くほどである。ここに同じく60代とみられる女性Zを加えた4人で、講座後に会場の外に残り話し込む様子が見られた。先ほど述べた O,P,Qは、「男組」にて既に顔見知りの状態であったことが話を聞いたことから分かっている。そのことが、3人が話す要因であったと推定する。O,P,Qは昨年もこの講座へ参加しており、当時話を聞いた際には、彼ら以外で新たに話すようになった人はいないと話した。

70代とみられる女性Zと4人に話を聞いた。5人はZが4人を誘いこの講座に参加したという。5人は既に友人関係にあり、もし友人がおらず1人だったら他の参加者に声をかけることもあったかとしれないが、そうではないため新しく友人関係を広げる意思はない、と話した。また、この5人で講座以外の日に遊びに行く、喫茶店に行くなどはあると話した。先ほどのR,Sは既に友人関係であったが一緒に入ったということではなく、お互いに広報を見て入会したため偶然であると話した。

3-3-5 フォークダンスのコミュニティ

「フォークダンス」は2週間に1回開催される。2020年に2回、2021年に2回の計4回の見学を行い、参加者の平均人数は11.3人であった以下、参与観察と聞き取り調査の結果を元にコミュニティを記述する。

この講座は「コミュニティにかんする調査をするのであればぜひ。」とクラブマネージャ

³³ 以下この項の記述は2020年の7月2日と7月16日、2021年の10月7日と11月11日の参与観察、聞き取り調査より

一に言われた講座である³⁴。クラブマネージャーは入会希望の電話にて「みんなとお喋りしたい、友人を作りたい。」と話す人に対してフォークダンスを勧めると話した。フォークダンスの講座の雰囲気の良さを知っていることが理由である。

この講座は参加している会員が全員高齢の女性であった。参加者の半数は服の色や柄が派手なものを着用しており、その他 3 つの講座では観察できなかったこの講座の特徴である。講師の妻は「入会して参加している人は大体同年代なので仲良くなりやすいと思う。」と話した。70代とみられる女性 α に話を聞いた際、顔を合わせたら話し始めることが女性の特徴だと話した。

講師の男性は「参加する会員の顔ぶれは数年変わらず、顔を合わせている期間が長い。講座の時間も他の講座よりも 30 分ほど長い。」と話した。そして「人数も 10 人前後のため、会員同士が仲良くなりやすいのではないか。」と続けた。70代とみられる女性 2 人に話を聞いた。2 人はいつも講座後に、2 人を含む 3 人から 5 人で会場近くのカフェに行っている。実際にその様子を観察することができた。一緒に行く人とはこの講座で知り合い、プライベートな話題を共有し、住所を知る仲にまで発展している。講座で頑張った後の反省会として位置付けている。この女性 2 人を含む集団は昨年も講座後にカフェへ行く様子が観察することができた。

この講座は全員名札をしており、全員がお互いの名前を知っている。講師の妻も会員の名前を全員覚えている。名前を呼び合うことは親しいコミュニケーションへの一歩目であり、挨拶だけでなく、会員同士名前で呼び合い親しく話す様子が見られた。

基本的にフォークダンスは参加している会員で円になり手を繋ぐ。グループでのダンスもあるので会員同士のコミュニケーションが必須である。講座を 2 回見学したが、2 回とも同じステップを練習していた。

先ほどの α ともう 1 人の 70 代とみられる女性 β の 2 人に話を聞いた。2 人は入会前からすでに友人関係であり、休憩中には親しく話をしていた。2 人は貯筋運動も参加しており、そこでは 2 人を含む 4 人で親しく話し込む様子が観察できた。

3-4 質問紙調査の結果から分析する各コミュニティを形成する参加者

前節では参与観察と聞き取り調査の結果から各講座のコミュニティの性格を分析した。しかし、そうした各講座のコミュニティの違いはどのような背景から来るのだろうか。それを明らかにするために、本研究では講座参加者への質問紙調査を行った。質問を 7 項目用意し、4 講座 50 人から回答を得た。その各講座別単純集計の結果は、表 9 の通りである。

³⁴ 以下この項の記述は 2020 年の 7 月 2 日と 7 月 16 日、2021 年の 10 月 7 日と 11 月 11 日の参与観察、聞き取り調査と 2021 年 7 月 30 日のクラブマネージャーへの聞き取り調査より

表 9 質問紙調査の単純集計の結果一覧

男組 2021年10月6日 14人		太極拳 2021年11月4日 13人		貯筋運動 2021年10月7日 13人		フォークダンス 2021年11月10日 10人	
Q1.現在自分も含めて何人で住んでいるか		Q1.現在自分も含めて何人で住んでいるか		Q1.現在自分も含めて何人で住んでいるか		Q1.現在自分も含めて何人で住んでいるか	
1人	1	1人	3	1人	2	1人	3
2人	11	2人	6	2人	6	2人	2
3人	2	3人	2	3人	2	3人	3
4人以上	0	4人以上	2	4人以上	3	4人以上	2
Q2.現在誰と一緒に住んでいるか (複数選択可)		Q2.現在誰と一緒に住んでいるか (複数選択可)		Q2.現在誰と一緒に住んでいるか (複数選択可)		Q2.現在誰と一緒に住んでいるか (複数選択可)	
親 (義理の親を含む)	0						
配偶者	12	配偶者	8	配偶者	7	配偶者	3
子やその配偶者	1	子やその配偶者	3	子やその配偶者	5	子やその配偶者	3
孫	0	孫	1	孫	2	孫	2
その他	1	その他	0	その他	2	その他	1
Q3.講座に参加した理由 (複数選択可)		Q3.講座に参加した理由 (複数選択可)		Q3.講座に参加した理由 (複数選択可)		Q3.講座に参加した理由 (複数選択可)	
体を動かしたかったから	12	体を動かしたかったから	12	体を動かしたかったから	12	体を動かしたかったから	9
この講座に興味があったから	6	この講座に興味があったから	6	この講座に興味があったから	3	この講座に興味があったから	4
友人を作りたいから	3	友人を作りたいから	0	友人を作りたいから	0	友人を作りたいから	2
地域とのつながりを作りたいから	4	地域とのつながりを作りたいから	0	地域とのつながりを作りたいから	0	地域とのつながりを作りたいから	3
時間に余裕があって新しいことを始めたから	5	時間に余裕があって新しいことを始めたから	2	時間に余裕があって新しいことを始めたから	3	時間に余裕があって新しいことを始めたから	1
人に誘われたから	0	人に誘われたから	1	人に誘われたから	2	人に誘われたから	0
その他	2	その他	2	その他	0	その他	1
Q4.当講座への参加歴		Q4.当講座への参加歴		Q4.当講座への参加歴		Q4.当講座への参加歴	
1年	7	1年	6	1年	1	1年	1
2年	2	2年	0	2年	3	2年	1
3年	3	3年	0	3年	8	3年	0
4年	0	4年	1	4年	1	4年	1
5年	2	5年	1	5年	0	5年	2
6年	0	6年	0	6年	0	6年	1
7年	0	7年	0	7年	0	7年	0
8年	0	8年	0	8年	0	8年	2
9年	0	9年	0	9年	0	9年	0
10年	0	10年	3	10年	0	10年	2
11年	0	11年	2	11年	0	11年	0
Q5.会場までの交通手段		Q5.会場までの交通手段		Q5.会場までの交通手段		Q5.会場までの交通手段	
徒歩	2	徒歩	1	徒歩	1	徒歩	3
自転車	8	自転車	4	自転車	6	自転車	3
車	7	車	8	車	8	車	3
バス	0	バス	0	バス	0	バス	0
家族、友人などの送迎	0	家族、友人などの送迎	0	家族、友人などの送迎	0	家族、友人などの送迎	1
その他	0	その他	0	その他	0	その他	0
Q6.性別		Q6.性別		Q6.性別		Q6.性別	
女性	0	女性	12	女性	11	女性	10
男性	14	男性	1	男性	2	男性	0
Q7.年齢		Q7.年齢		Q7.年齢		Q7.年齢	
60代	5	50代	1	60代	1	60代	1
70代	9	60代	5	70代	12	70代	9
		70代	7				

まずは、この質問紙調査の結果から各講座の参加者について記述する。

「男組」では14人にアンケート調査を実施した。参加者のうち、配偶者との2人暮らしをしている人が8割を超えている。そして体を動かす目的で講座に参加する人が8割を超えている。さらに、友人を作る目的、地域とのつながりを作る目的で参加している人が存在し、計7ポイントである。しかし人に誘われたから参加したという人は存在しない。参加して1年にも満たない人が講座の参加者の半数を占める。この講座は前述の通り男性だけの講座である。65歳以上の高齢者に限定された講座であるが、65歳から69歳の人が5人参加している。

「太極拳」では13人にアンケート調査を実施した。普段2人以上で生活をしている人が8割弱存在する。体を動かす目的で参加している人が9割存在しているが、地域、友人などつながりを目的に参加している人は存在しない。人に誘われて参加している人が1人存在する。参加して1年にも満たない人が6人、10年以上参加している人が5人と、新旧参加者が共にいる講座である。参加者の9割は女性である。年齢層は50代から70代以上とばらつきがあり、50代の参加者が確認された唯一の講座である。

「貯筋運動」では13人にアンケート調査を実施した。普段2人以上で生活をしている人が8割を超えている。体を動かす目的で参加する人が9割存在しているが、地域、友人などつながりを目的に参加している人は存在しない。人に誘われて参加している人が2人存在する。参加してから1年に満たない人、2年経過している人、3年経過している人が参加者の9割を占める。参加者の8割は女性であり、70代以上の人が9割である。

「フォークダンス」では10人にアンケート調査を実施した。普段2人以上で生活をしている人が7割存在する。体を動かす目的で参加する人が9割存在している。そして地域とのつながりを作る、友人を作る目的で参加している人が存在しており、計5ポイントである。人に誘われたから参加した人は存在しない。参加して1年に満たない人から、10年経過している人まで、新旧参加者が共にいる講座である。この講座は全員女性で、70代以上の人が9割である。

次に、各質問について、講座間での比較や、比較することでみえてくる全体像を記述する。

1つ目は「現在自分も含めて何人で住んでいるのか」という問いである。「男組」の参加者は、2人暮らしをしている人が8割ほど存在する。他の3つの講座においても、普段2人以上で生活している人が7割を超えている。全体としては2人以上で生活をしている人は8割を超える。これは日常的に人と関わり生活を送る人が多いことを示している。講座は、家族以外の人と会う機会を提供する場となっている。独居者にとっては、同世代の人と会う、日常とは異なる機会を提供する場となっている。

2つ目は「現在誰と一緒に住んでいるのか」という問いである。「男組」の特徴として、先ほどの質問にも関連するが2人暮らしをしている人がかなり多く、配偶者と生活をしている人が8割を超える。「太極拳」においても配偶者と生活をしている人が6割を超える。「貯筋運動」「フォークダンス」では「子やその配偶者と住む人」と「孫と住む人」の合計が、「配偶者と住む人」よりも多くなっている。全体としては配偶者と住んでいる人が30人であり、同世代の異性と日常的にコミュニケーションをとる機会を持つものが6割である。親と暮らしている人がいなかったのは、質問の対象者が高齢であったためだと考えられる。

質問1と質問2の結果から、講座に参加する人は、普段2人以上で生活を送っているため、人とコミュニケーションをとる機会が確保されていると考えられる。また質問6と質問7の結果も考慮すると、参加者にとって講座は、日常生活とは異なる、同世代の同性とのコミュニケーションの場を提供していることが明らかになった。

3つ目は「講座に参加した理由は何なのか」という問いである。どの講座の参加者も体を動かす目的で参加する人が8割を超えている。これは生き生きかにエスポーツクラブが立てている、2つの目標のうち1つ「中高年の健康維持」という言葉通りに講座が催されていることを示す。「男組」と「フォークダンス」の講座においては友人を作る、地域とのつながりを作る目的で参加している人が存在している。しかしその数の合計は12ポイントで、50人に調査したことを考慮すると少ない数字である。この2つの講座は、どちらか一方の性別のみの参加者で構成されている。「太極拳」と「貯筋運動」の講座においては、人に誘

われたから参加した人が存在している。これは既存の友人関係から参加に至った人がいることを示している。

4つ目は「当講座への参加歴」という問いである。「男組」と「太極拳」の講座においては1年目の人が講座の半数近く存在する。前述の通り「太極拳」には人に誘われたから入会した人が計1人存在するが、新規参加者と既存の参加者は、元々友人関係ではない場合が圧倒的に多いと考えられる。すると、この2つの講座では、会員同士が親しくなる場合、0からの関係の構築が必要となる。「太極拳」では10年以上参加している人も4割存在しており、新旧参加者が混在している。「貯筋運動」では3年目の人が6割存在している。「フォークダンス」では参加してからの年数が、1年目から10年目まで点在している。全体として、参加してから1年に満たない人が3割存在し、参加者は固定されておらず流動的であることが分かる。

5つ目は「会場までの交通手段」という問いである。どの講座も自転車と車を使って会場まで来ている人が多い。「男組」「太極拳」「貯筋運動」では9割近くの人が自転車か車が交通手段だと回答している。全体で見ると車を交通手段としている人が5割を超える。これらの講座に参加している人は健康であることを示している。

6つ目は「性別」という問いである。「男組」は講座名が示す通り男性のみである。一方「フォークダンス」では参加者は女性のみである。「太極拳」と「貯筋運動」では男性が参加者全体の1割にも満たない。「男組」を除く3つの講座では9割が女性であり、女性が圧倒的に多いことが分かる。

7つ目は「年齢」という問いである。「男組」と「太極拳」は70代以上ばかりではなく、60代と50代も3割以上存在する。「貯筋運動」と「フォークダンス」は70代以上の参加者が9割を超える。全体としては70代以上が7割以上という結果となっているが、これは平日の午前中に時間がある人が参加しているため、納得のいく結果である。

4 各講座のコミュニティ形成にかんする考察

4-1 参与観察、聞き取り調査の結果と質問紙調査の結果を合わせて、各コミュニティについて考察する目的

3章ではまず、参与観察と聞き取り調査の結果から各コミュニティの性格を描写した。続いて、各コミュニティの性格の違いにある背景を探るために、質問紙調査の結果から各コミュニティを構成する参加者を分析した。

本章では参与観察、聞き取り調査の結果と質問紙調査の結果を合わせて、各講座において、なぜ、そのようなコミュニティの性格になっているのかについて考察する。双方を合わせ考察することで、参与観察、聞き取り調査の記録だけでは見えてこなかったコミュニティの性格を、より詳細に表す。そして、コミュニティの性格を形成している要因を明らかにしたい。

4-2 男組：親密度が低い背景

参与観察と聞き取り調査のデータから見えてきた「男組」のコミュニティの性格は、女性が主となる他の講座と比較して、コミュニティの親密度が高くないということである。参加者は全員名札をするにもかかわらず、お互いに名前を知らない状況が生まれている。体操教室では、講師に反応してよく声を出す人が存在するものの、講座開始前や講座中に、誰も声を上げない静かな時間が流れる。体操教室の講師を務めるクラブマネージャーも、男性と女性の講座と比較した時に、その仲の良さの違いを感じている。

質問紙調査の結果をふまえると、コミュニティの親密度に影響を及ぼしている要因が「性別」という要因の他にもあるのではないかと考えられる。

この講座のコミュニティの性格を形成している要因は「居住状況」「参加年数」「講座に参加した目的」である。

質問紙調査によると、人に誘われたから参加した人は存在せず、参加して1年の人が参加者全体の半分を占めていた。男組は体操教室と料理教室がおよそ毎月1回ずつ開催される。そしてこの講座の参加者は、日常では配偶者と2人で暮らしている人が8割近く存在する。つまりこの講座は、参加者の半数が初対面の人で構成されている、月に2回集うコミュニティであり、その参加者は、同世代の同性と同じ空間にいるという状況に慣れていないと思われる。初対面であっても顔を合わせたら会話が弾む、という女性とは異なり、高齢の男性だけで構成された空間ゆえに、会員同士の会話が少なく、静かな雰囲気であったと考えていた。しかしこのような背景も関係しているのではないかと思う。

質問紙調査では意外にも「友人を作りたい、地域とのつながりを作りたい」という理由で参加している人が存在していると分かった。聞き取り調査からも、そのような目的意識を持って参加している人の存在を確認することができている。地域コミュニティのために参加し

ていると話した人は、講座前や講座中に参加者が誰も話さず、声を出しづらい空気を意図的に崩すかのように、講師の呼びかけに反応してよく声を出していた。また、この講座では60代の参加者が3割を超えていた。講師の呼びかけに対して、反応良く応え、声を出す人へ聞き取り調査をした結果、全員70代以上であった。観察の結果、60代と70代以上の人には見た目や言動に差があり、比較的若い外見をしている人はあまり声を出していなかったことに気づいた。ゆえに、観察からある程度の年齢を予測することが可能だった。おとなしい60代の人3割存在する空間であったことも、全体として静かな雰囲気になっていた要因の1つとして考えられる。

4-3 太極拳：「おばさんコミュニティ」が生まれる背景

参与観察と聞き取り調査のデータから描写して見えてきた「太極拳」のコミュニティの性格は、参加者の言葉を引用すると「おばさんコミュニティ」と言い表せる。名前も連絡先も知らないが、顔を合わせたら話す女性ならではの形が生まれている。また、休憩中に話している2人組が数多く存在した。

質問紙調査の結果をふまえると、「おばさんコミュニティ」が生まれる状況について推測することができる。

この講座のコミュニティの性格を形成している要因は「女性」「居住状況」「参加年数」「既存の友人関係」「定位置」である。

質問紙調査によると、参加者の9割以上は女性であり、2人以上で生活をしている人が7割を超えていた。そして、配偶者と生活をしている人が半数以上であった。同世代の異性と同居している人が多いと考えられることを示すが、コミュニケーションをとること自体には慣れていると思われる。

さらに質問紙調査の結果から、この講座は参加歴が1年目の人が6人、10年目と11年目が5人と新旧参加者が共にいる講座であることが分かった。

休憩中の参加者の様子を観察していると、親しく話している2人組が5つ存在することに気づいた。そのうち3組に話を聞くことができたが、3組ともこの講座に参加する前から親しい間柄であった。

この講座では休憩中、自分の席に座って休憩をする。その椅子の配置は自由であるが、参加者各々にいつもの決まった場所があることが、3回の見学を経て明らかとなった。

既に親しい2人組同士が、定位置が近隣である別の組、もしくは1人である人を巻き込み、顔は分かるが名前や連絡先は知らない状態で、講座のことからプライベートな話題まで話す、という形が「おばさんコミュニティ」の背景にあるものではないかと考えた。

4-4 貯筋運動：グループ間の親密度が低い背景

参与観察と聞き取り調査のデータから描写して見えてきた「貯筋運動」のコミュニティの性格は、親しい関係性のグループがいくつかあり、そのグループ内の親密度は高いがグループ間の交流は少ないということである。実際に聞き取り調査において、一緒に北海道へ旅行した人の存在を確認したことは、その親密度の高さを示している。また、講座以外の場で会うこともあるという話も、参加者同士の関係が講座だけではとどまらないことを示し、その親密度の高さがわかる。一方で、すでに友人関係があるため新しく友人を作ろうとは思わないという主旨の話も聞いた。

質問紙調査の結果とあわせて考察すると、その背景には様々な要因があると考えられる。

この講座のコミュニティの性格を形成している要因は「参加年数」「特別講座であるということ」「講座に参加した目的」「定位置」である。

質問紙調査の結果によると、この講座に参加して3年以上経っている人が9人いた。9人は3年間毎月顔を合わせる機会があったということである。

この講座は特別講座という位置付けで、常設講座に参加する人が参加資格を有する。他の常設講座で顔を合わせ、さらにこの講座でも顔を合わせているという場合、単純に接点が増えるために親しくなる十分条件は満たしていると言える。

質問紙調査の結果によると、人に誘われたから参加していると回答した人が2人いる。この講座に参加する前から友人関係である人と、一緒に参加しているということだった。実際に「フォークダンス」に参加していた2人が、この講座と一緒に参加しており、親しく話す様子を観察した。これらは、参加者同士の親密度が高いであろうことを示していると考えられる。

この講座も「太極拳」と同様に、定位置があるということを観察によって気づいた。参加者は会場に到着した人から椅子をとり、円状に配置する。定位置があるということは、いつも決まった人の隣に座るということである。話を聞いた人は全員、隣に着席している人とは友人関係にあると分かった。隣に友人がいる状況で、その人を差し置いて他の人と話すという状況は考えづらい。

4-5 フォークダンス：親密度が高い背景

参与観察と聞き取り調査のデータから描写して見えてきた「フォークダンス」のコミュニティの性格は、観察した講座の中で会員同士の親密度が最も高いということである。名札をするので参加者同士の名前が分かり、参加者は他の参加者の名前を知っている。グループワークによってコミュニケーションの場も確保されている。講座は同世代の女性のみで構成されており、派手目な服装を着用した人が参加者の半数であった。クラブマネージャーも友人を作りたいと話す人にはこの講座を勧めるという。

質問紙調査の結果をふまえると、コミュニティの親密度に影響を及ぼしている要因は「女

性」と「年齢」だけではない。

この講座のコミュニティの性格を形成している要因は「目的意識」「参加年数」である。

質問紙調査では友人を作りたい、地域とのつながりを作りたいという目的を持ち参加している人が存在していると分かり、前述のクラブマネージャーの話を裏付ける。

質問紙調査の結果によると、参加している人の年齢層は9割が70代以上であった。前述の通り、観察から参加者の半数は、服の色や柄が派手なものを着用していると気づいた。その側面からも同じ性質の人が集まっており、参加している人はある種の居心地の良さ、親近感を感じているのではないかと考える。

質問紙調査によると、参加して1年目の会員から10年目の会員まで点在していると分かった。つまり、講座に参加する会員は、長年継続して参加し続けていることが分かる。これらが「フォークダンス」の講座の親密度を高くしている一因だと考える。

4-6 コミュニティの親密度に関係する要因

4-6-1 要因を特定するための方法

3章では参与観察と聞き取り調査によるデータからコミュニティを描写し、質問紙調査によるデータから講座の参加者を分析した。本章のここまでは、参与観察、聞き取り調査の結果と質問紙調査の結果を合わせた観点から、各講座のコミュニティの性格とそれを形作る要因を考察した。

以上を踏まえて以下では、コミュニティの親密度に関係する要因が何かを総合的に考察してみたい。この問いを明らかにするために参与観察、聞き取り調査、質問紙調査のデータを横断的に分析し、コミュニティの親密度に関係する要因を以下の7つに分けて考えた。

1. つながりを作ることを目的に参加しているか否か
2. 女性であるか否か
3. 参加している会員が固定されているか否か
4. 名札の存在（親しい関係性でない状態でも名前を呼び合うことができる環境か否か）
5. 反応がよい会員の存在（その会員が積極的に周囲に話しかけるか否か）
6. グループワークが存在するか否か
7. 既に親しい関係であるか否か

以下ではこの7つについて順をおって考えてみたい。

4-6-2 要因 1: つながりを作ることを目的に参加しているか否か

第一の要因として考えられるのが、「つながりを作ることを目的に参加しているか否か」である。質問紙調査で、講座に参加した理由を聞いた。ここで「友人を作りたいから」

「地域とのつながりを作りたかったから」と答えた人が確認されたのが「男組」と「フォークダンス」である。「男組」では、聞き取り調査でも、つながりを作るために参加しているという会員から話を聞いた。つながりを作る目的が行動に表れるとするのであれば、他の会員との親密度をあげる行動をとる、つまり積極的に話しかけに行くことは合点がいく。

「男組」では1人の男性が地域コミュニティのために参加していると話した。地域社会とのつながりを重要視している彼は、ラジオ体操を行う会を主催してするなど、つながりのために積極的に動いている。ただ体を動かすだけならば現在通っているジムだけで十分だと話した彼は、講座中、講師の呼びかけに反応してよく声を出していた。その声は講座の雰囲気明るくし、他の参加者が声を出し始めるきっかけを作っていた。

「フォークダンス」では、会員からはそのような話を聞くことはできなかった。しかしクラブマネージャーは「みんなとお喋りしたい、友人を作りたい」という電話を受けた時、フォークダンスを勧めると話した。フォークダンスの講座の雰囲気の良さを知っていることが理由であり、高齢女性が集いグループワークもあるこの講座は、つながりを求める人にとっては居心地がよい場所となるだろう。

「つながりを作ることを目的に参加しているか否か」は、コミュニティの親密度にかかわる要因であるといえるだろう。

4-6-3 要因 2:女性であるか否か

第二の要因として考えられるのが、「女性であるか否か」である。これは「男組」と、その他の講座を比較することで導き出した要因である。初対面の人と話し始めるということにかんして、女性は男性よりも積極的であるということを感じた。

「男組」では、参加者の半数が参加してから1年に満たない人であった。初対面の人が多い男性たちは、会員同士で話すということは少なく、講座開始前は静かな雰囲気であった。

「太極拳」では、女性3人に話を聞いた際、お互いに名前や連絡先も知らないが、いつもの席が隣というだけで話す「おばさんコミュニティ」というワードが出てきた。同様の話を「フォークダンス」においても聞き取ることができた。顔を合わせたら話し始めるのが女性の特徴だと話していた。

加えて「同性であるか否か」も要因となると考える。「貯筋運動」では、男性が3人参加しており、講座前も休憩中も常に3人で話し込んでいた。周囲に女性が多くいたが、女性からも彼らからも、話しかける様子は見受けられなかった。大勢の女性のなかに少数の男性が存在するという状況では、男性の立場から考えると、女性に話しかけるよりも男性同士で話す方が、心理的負担が少ないのだろうと推測する。

「女性であるか否か」、さらに言及すると「同性であるか否か」は、コミュニティの親密度にかかわる要因であるといえるだろう。

4-6-4 要因 3:参加している会員が固定されているか否か

第三の要因として考えられるのが、「参加している会員が固定されているか否か」である。長年顔を合わせていると顔馴染みになり、話始め、親しくなる、ということは当然考えられる。親密度に関係する要因として「年数」は外すことはできない。

「太極拳」においては10年以上参加する女性2人が「今年は長年参加していた人が多く辞めてしまい、新しく入ってきた人が多く、そういう人とはまだ話したことがない」と話した。「辞めてしまった人達とはこの講座を通して親しい関係になっていた」と続けた。

ここでは休憩中1人で椅子に座っているか体を動かしていた2人に話を聞くと、2人とも今年から入会した人で、まだ友人はできていないと話した。講師も今年新しく入った人が多いので静かな雰囲気であると語った。

「貯筋運動」では、親しく話す女性3人に話を聞き、3人ともこの講座に入って3年は経つので、長年顔を合わせるうちに仲良くなったと話した。

「フォークダンス」においても、講師の男性は「参加する会員の顔ぶれは数年変わらない」「会員同士顔を合わせている期間が長く、講座の時間も他の講座よりも30分ほど長い」「人数も10人前後のため会員同士が仲良くなりやすいのではないかと話した。

「参加している会員が固定されているか否か」は、コミュニティの親密度にかかわる要因であるといえるだろう。

4-6-5 要因 4:名札の存在(親しい関係性でない状態でも名前を呼び合うことができる環境か否か)

第四の要因として考えられるのが、「名札の存在」である。「男組」と「フォークダンス」の講座では名札を用意し、胸の位置につける。このため呼びかけたい相手のことを名前で呼ぶことができる。これは講師にとっても会員にとっても良いことが多いと思う。

自分にとって親しい人の名前は必ず知っていることから、相手を名前で呼ぶことは親近感を高める一歩目であると考えられる。新しく関係性を築く時にまず覚えるのは名前である。名札の存在により、名前を知る、覚えるという段階を省略することができる。

しかし「男組」では、全員の名前を知らないと言う男性が複数人いた。名札があるにもかかわらず、名前すら覚えようとはしないということである。同じ講座でも親しくない人には関心がないようであった。しかし、仮にそこから心境に変化があり、他の参加者と親しくなりたと思った時に、名札の存在は関係性の構築を助けるものだと考える。

関係性の親密度が高まったのちに名前を知る、ということもある。「貯筋運動」では、その話を聞くことができた。元々友人関係ではない2人だったが、講座に参加し何度も顔を合わせて話すようになり、名前を知る関係になったという。

そして「太極拳」では、話すもののお互いに名前を知らないという関係性の「おばさんコ

コミュニティ」が存在していた。

必ずしも名札の存在が必要というわけではないが、参加する会員が毎年変わるので、新規参加者にとって名札の存在は親密度を高める要因であることは相違ないと言える。

「名札の存在」は、コミュニティの親密度にかかわる要因であるといえるだろう。

4-6-6 要因 5:反応がよい会員の存在(その会員が積極的に周囲に話しかけるか否か)

第五の要因として考えられるのが、「反応がよい会員の存在」である。これは講座前や講座の休憩時間に、静かな空気となっていた「男組」だからこそ、親密度に関係する要因だと感じた。講師の呼びかけに対して反応をする会員の声は、静かな空気を崩し、他の会員が便乗して反応するきっかけを作り出していた。そのような反応をする会員は参加者のなかでも明らかに年長者であり、参加歴も長い人だった。

「反応がよい会員の存在」はコミュニティの親密度にかかわる要因であるといえるだろう。

4-6-7 要因 6:グループワークが存在するか否か

第六の要因として考えられるのが、「グループワークが存在するか否か」である。グループワークがあった講座は、「男組」と「フォークダンス」である。講座中にグループワークがあるということは、会員同士でコミュニケーションをとる機会が確保されているということである。これは明らかに親密度に関係すると考える。

グループワークがない「太極拳」と「貯筋運動」では、他の参加者とコミュニケーションをとるには講座前、または講座の休憩時間に限られる。講座前や休憩中、参加者は自分の定位置に着席しているため、近隣にいる人はすでに親密度の高い人である場合がほとんどである。まだ親しい関係性ではない他の参加者と親密度を高めることにかんして、グループワークの存在は大変有意義である。

「男組」の体操教室では、グループワークは講座中になかなか声を出さない高齢の男性達が、グループワークによって強制的に声を出す状況に置かれることで、お互いに話すきっかけとなっていた。料理教室でも同様に、共同で調理作業に取り組むことで、必ずコミュニケーションをとる状況に置かれていた。

「フォークダンス」では、参加者全員で円になるダンスや、グループでのダンスもあり、会員同士でのコミュニケーションが必須だった。

「グループワークが存在するか否か」はコミュニティの親密度にかかわる要因であるといえるだろう。

4-6-8 要因 7:既に親しい関係であるか否か

第七の要因として考えられるのが、「既に親しい関係であるか否か」である。既に親しい関係性にあるかどうか、これは新しく関係性を築くための助けとなるということが分かった。一見つながりがないように見えるが、大いに関係する。

「太極拳」では3人の女性が談笑する様子が見られたので話を聞いた。2人は既に友人関係であるが、1人は名前も連絡先も知らないという間柄であり、「おばさんコミュニティ」である。この「おばさんコミュニティ」のきっかけとなるのが、既存の親しい関係性である。既に親しい2人、もしくは3人のなかに、近くにいるもう1人、もしくは別のグループが話しかけ、輪が広がるという事象を確認した。

「貯筋運動」では、同様に談笑する様子が見られた3人の女性に話を聞いた。元々2人はクラブに参加する前から友人関係にあり、1人はこの講座で話す間柄になったようである。

「フォークダンス」でも、すでに親しい関係の2人が巻き込む形で話の輪が広がっていた。

「既に親しい関係であるか否か」はコミュニティの親密度にかかわる要因であるといえるだろう。

4-6-9 まとめ

コミュニティの親密度が高くなるということは、そのコミュニティを形成している人同士が親しくなるということである。親しくなるためには、コミュニケーションをとることが必要となる。本研究において4つの講座を調査対象とし、参与観察、聞き取り調査、質問紙調査から収集したデータを横断的に分析した結果、コミュニティの親密度には7つの要因が関係すると考えた。

1つ目について、つながりを作りたいという目的を持った参加者は、その思いから他人と積極的に交流を図ろうとする。2つ目について、女性は初対面であっても話をする。3つ目について、長年顔を合わせて顔なじみとなった人同士は、コミュニケーションをとる可能性が高い。4つ目について、名前を呼びあうことは親交への一歩目であり、親しくない間柄の時に、名前を呼ぶことができることは、コミュニケーションの助けとなる。5つ目について、誰も話さない静かな雰囲気では話始めづらいが、声をよく出す会員の存在は、張り詰めた空気を崩し、コミュニケーションの助けとなる。6つ目について、グループワークは、参加者同士がコミュニケーションをとる機会となり、親しくなるきっかけである。7つ目について、すでに親しい関係性にある人の存在は、まだ親しくない人を巻き込んで会話の輪が広がる可能性を生む。

5 まとめ

この研究では現代社会の課題である「スポーツ機会の減少」と「人のつながりの希薄化」に対して、解決する手段の一つとして期待できる総合型地域スポーツクラブを取り上げた。

超高齢社会となり、町民のコミュニティ意識の希薄化に由来する問題を抱える蟹江町では、高齢者は総合型地域スポーツクラブにおいてコミュニティを形成しているのか、また、どのようなコミュニティを形成しているのかを明らかにする研究に取り組んだ。

参加者が全員高齢者で構成されている「男組」「太極拳」「貯筋運動」「フォークダンス」の4つの講座を調査対象とした。講座への参与観察と参加者への聞き取り調査を実施することで、コミュニティについてのデータを収集した。参加者への質問紙調査も実施した。

その結果、各講座で各々違うコミュニティが形成されていた。「男組」は参加者が65歳以上の男性に限定されており、女性が参加者の9割を占める他の講座と違ってコミュニティの親密度が高くないと分かった。「太極拳」では、すでに親しい関係性の2人組が複数組存在した。その垣根を越えて、名前や連絡先を知らない状態でも顔を合わせたら話すおばさんコミュニティというものが存在すると分かった。「貯筋運動」は「太極拳」と少し似ており、親密度の高い集団がいくつか存在しているが、親しくない他人とは話す状況が生まれにくいと分かった。「フォークダンス」は参加者全員が女性であり、そのコミュニティは最も親密度が高いと分かった。

各講座で異なるコミュニティが形成されていた。収集したデータから総合的に考察し、コミュニティの親密度に関係する要因は、1.つながりを作ることを目的に参加しているか否か、2.女性であるか否か、3.参加している会員が固定されているか否か、4.名札の存在、5.反応がよい会員の存在、6.グループワークが存在するか否か、7.既に親しい関係であるか否か、の7つにあることが分かった。これらの要因は、参加者同士のコミュニケーションを促進し、コミュニティ形成に影響を及ぼしていると分かった。

6 参考文献・参考資料

【参考文献】

- ・松宮朝,2013,「高齢者の「関係性の貧困」と「孤独死」・「孤立死」—愛知県愛西市の事例から—」『日本都市社会学年報』2012(30):15-28
- ・炭谷将史,2012,「総合型地域スポーツクラブを対象とした研究における成果と今後の課題」,『スポーツ産業学研究』22(2):281-293
- ・今野裕昭,1992,「都市コミュニティ形成と住民意識に関する一考察」,『社会学評論』43(3):285-303,373
- ・石盛真徳,2004,「コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加:コミュニティ意識尺度の開発を通じて」,『コミュニティ心理学研究』7(2):87-98
- ・斎尾直子,宮川大介,2006,「過疎農村地域におけるスポーツネットワークを通じた地域づくりに関する研究」,『農村計画学会誌』25(Special Issue):299-304
- ・細田隆,瀬田史彦,小泉秀樹,2016,「地方自治体におけるスポーツ政策の新たな展開に関する研究」,『都市計画論文集』51(3):216-221
- ・田中尚人,二村春香,秋山孝正,2006,「水辺の都市形成におけるコミュニティの変化に関する考察」,『土木計画学研究・論文集』23:407-415
- ・赤澤宏樹,中瀬勲,1998,「高齢者の緑化活動によるコミュニティ形成の構造に関する研究」,『ランドスケープ研究』62(5):631-634

【参考資料 URL】

- ・文部科学省,第2期「スポーツ基本計画」
https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf
- ・スポーツ庁,令和2年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/sports/1415963_00004.htm
- ・スポーツ庁「スポーツ実施率向上のための行動計画」
https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/10/02/1408815_01.pdf
- ・スポーツ庁
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop05/list/1371972.htm
- ・蟹江町,第5次蟹江町総合計画
<https://www.town.kanie.aichi.jp/uploaded/attachment/12647.pdf>
- ・総務省統計局ホームページ
<https://www.stat.go.jp/data/topics/topi642.html>
- ・蟹江町,第9次高齢者保健福祉計画及び第8期介護保険事業計画
<https://www.town.kanie.aichi.jp/uploaded/attachment/12440.pdf>

- ・文部科学省

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/029.htm

- ・文部科学省,総合型地域スポーツクラブ育成マニュアル

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/004.htm

- ・文部科学省,令和2年度総合型地域スポーツクラブ育成状況(一覧表)

https://www.mext.go.jp/sports/content/20210409_spt_kensport01_000013940_01_1.pdf

(以上全て2021年12月14日最終閲覧)

【その他の参考資料】

- ・生き生きかにえスポーツクラブ,「10周年記念誌」,2019
- ・生き生きかにえスポーツクラブ,「令和3年度年間日程予定表」,2021
- ・蟹江町役場介護支援課「男組参加者募集チラシ」,2021

謝辞

本論文執筆にあたり、調査に快くご協力いただきました「生き生きかにエスポーツクラブ」クラブマネージャーの照内由美様、「男組」「太極拳」「貯筋運動」「フォークダンス」の講師や参加者の会員の皆様に感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

またこの研究・執筆のご指導いただきました指導教官の宮内泰介先生をはじめ、地域科学研究室の先生方、同期生にこの場を借りて御礼申し上げます。